The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懐徳堂関係研究文献提要（五）
Author(s)	
Citation	懐徳. 1987, 56, p. 100-103
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90686
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈懐徳堂関係研究文献提要㈤〉

⒀論文：梅溪　昇「懐徳堂における儒学と町人」（『大阪春秋』31・昭和五十七年）

本論文は、懐徳堂が享保期に成立した歴史的可能性と必然性とを考察し、さらに懐徳堂の講義内容とその学問意識の性格を探るとともに、当時の儒学と町人との関係を明らかにせんとしたものである。全五節より成る。

㈠徳川氏が儒教を採用したのは、その抑商主義的傾向が、封建制度と適合し、かつその道徳的階級制維持が、封建制度の運用に最適だったからであった。江戸時代に盛行した朱子学・徂徠学も、相異なる点はあったが、儒教本来の抑商的性格を顕著に示す点では通ずるものをもっており、商人階級とは相容れないものであった。儒学がこうした傾向を固持し続けていたならば、懐徳堂が町人社会に受け入れられる歴史的可能性はなかったはずである。

㈡荻生徂徠は露骨な抑商論を展開しているが、反面このことは、彼がそれだけ商人や貨財について強い関心を示していたとも言える。徂徠学派の流れをくむ護園学派は、それを継承させ、商人を賤しめながらも商人の存在を受け入れ、さらにその生業の道徳的基礎を論ずるに至った。こうして本来的に武士階級の学問であった儒学も、時代の推移に従って次第に町人の社会的存在を是認するようになり、学問自体も変質していき、町人階級の学問たりうる歴史的可能性が生まれてきたのであった。懐徳堂の成立時期が元禄を経た享保期であったことも、学問史上当然のことであった。

㈢懐徳堂の創建・運営に関与したのは、船場を中心とする上層富裕商人であった。彼等は文化的教養を身につけるために学問・文化に関心を抱くようになったのであるが、その興味が漢詩文にではなく、儒学の教学としての側面に向けられていたことには、重要な意味がある。当時の商家における主人と雇人、主家と別家との関係は、厳重な階級的差別をもつ主従関係によって保たれていた。そこで彼らは、武士の主従関係、封建的社会秩序の維持に大きな役割を果していた儒学に、その拠り所を求めたのである。また、享保期の緊縮政策によってもたらされた不況を乗り切るために、商家経営の革新をはからざるを得なかったことや、宝永二年の淀屋闕所事件によって、商人達が家の存続に危機感をもったことも、儒教の教学面に関心を抱くに至った要因と思われる。こうした諸事情に加え、大阪の上層町人の間から、町人みずからの教化機関が要求され、成立してくる歴史的必然性があったと言える。

㈣懐徳堂定約を見ると、講義書は「四書・五経其外道義之書」に限られている。さらにその内容を検討してみると、儒学の特定の学派に固定することなく、日常実践を目ざす学風であることが、うかがえる。また、同志の会合では町人の自発的な学習・修養が行われており、特に注目すべきものである。懐徳堂の学問内容や学問意識には、従来から指摘されているように、武士的な側面も確かにある。しかし反面、町人的な日用実用の学も目ざしていたのである。このことは、読書手習などの

少年の教導を許容し、かつその為に具体的なカリキュラムまで定められていたことからも、明らかである。

(五)初代学主三宅石庵は、町人に学問の必要性を説き、二代目中井甃庵は商行為を賤しむ通説を否定し、商利をその社会性において肯定した。さらに商人の生業を道徳的に基礎づけ、商人の道義にかなった利を奨励さえするようになった。こうして彼等の学問は、町人に受け入れられたのである。中井竹山の学問は武士的なものをそなえてはいたが、一方ではその著書『蒙養篇』において、商家の主従関係における主人の「慈悲」を述べるなど、きわめて町人的な面も具有していた。

これらを考えれば、懐徳堂は一面において武士的な学問意識をもちながら、他面「大阪の人心風俗を正しくし、算盤量衡の目に現れぬ心の勘定」（西村天囚）によって、大阪の繁栄をもたらしたものということができよう。

(14)論文：作道洋太郎「懐徳堂の経済思想――草間直方『三貨図彙』について――」（『大阪の歴史』4・昭和五十六年）

本論文は、草間直方の経済思想を、その著書『三貨図彙』を中心に考察するものである。(一)懐徳堂学と草間直方、(二)草間直方の経済思想、(三)『三貨図彙』の構成、(四)貨幣に関する見解、(五)物価に関する見解、(六)度量衡・紙幣・為替・徳政・貿易などに関する見解、以上六節より成る。

(一)懐徳堂は江戸湯島の昌平黌とは異なり、町人向けの教養的儒学を創造したところに大きな意義が認められる。懐徳堂の所謂五同志の一人鴻池家の別家にあたる草間直方は、明和期（一七六四～七二）の頃から、懐徳堂に関わるようになった。直方は肥後藩、播州山崎藩等、諸藩との商取引を通じ、次第に諸藩の経済顧問としての性格を強めていった。そういった経験をふまえて、彼は寛政年間から著述に力を注ぐようになり、『三貨図彙』をはじめ、多くの著書をあらわした。

(二)江戸時代の経済学説は、「大抵はきわめて雑駁であって秩序立ったものではない」（本庄栄治郎『日本経済思想史』）。懐徳堂の学問もまた、そのような限界がみられるが、従来の「経世済民」や、のちの「経国済民」といった思想とは異なる、実学的な性格も持っていた。直方が師事した竹山にも、それがあてはまる。本庄氏はまた、保守的な本居宣長から、革新的な本多利明・佐藤信渕への転換点をなすものとして、竹山を捉えている。大阪の町人学者草間直方は、『三貨図彙』のようなすぐれた著作をあらわし、その思想にもやはり、実学的な特徴をうかがうことができる。

(三)『三貨図彙』は、三貨に関する「三貨之部」とでも名づけられるべき部分、「物貨之部」とされる部分、度量衡・紙幣・為替などに関する記述のほかに新井白石・松平定信などの著作からの抄録を含む「附録之部」、米相場等を扱った「物価之部」の四つの部分からなる。

このように、『図彙』は貨幣史・物価史などに関する江戸時代最高の労作であり、先行する貨幣学の成果を集大成したものである。明治維新後の『大日本貨幣史』の修史編纂において、

『図彙』はその原型となったのである。

㈣「三貨之部」には、日本の古代より近世にかけての貨幣事情が説かれているが、元禄より元文の間における貨幣改鋳と、享保十五年の藩札発行の解禁令との関係を論じた直方の貨幣論には卓抜なものがあり、竹山につらなる懐徳堂の経済思想をうかがうことができる。また、政策提言や時勢論に類した意見も見られ、町人学者による「経国済民」論とも考えられる点も見い出すことができる。

㈤「物価之部」には、直方の物価論、貨幣金融論をはじめ、物価や貨幣の変遷などが記され、「遺考之部」には、文化十三年より文政八年までの比価や米価が、補遺として書き加えられている。これらの記述には、直方の両替商経営という、生活体験に即した実学的なものが見られ、単なる「経国済民」論とは違った経済思想をうかがうことができる。

㈥「附録之部」には、まず度量衡の沿革について述べられており、次いで為替や田畑・家屋敷の売買等実際的な諸問題がとりあげられている。さらに、新井白石・松平定信等の著作から抄録をしているが、その中でも興味深いのは、太閤秀吉の金権体質を見抜き、政治の刷新や検約思想の徹底を重視した、小瀬甫庵の文章を収録していることである。直方は、彼の文章のなかに、歴史の教訓を読みとったのであろう。

最近、江戸時代の経済思想が見直され、単に思想の領域だけにとどまらず、そこからわが国の経済学や経済政策原理の生成過程を検出しようとする動きが、盛んになりつつある。草間直方のような町人学者については、それを生み出した懐徳堂の学問や、彼の家業経営との関連から再検討を行い、その上で「経世済民」論や「経国済民」論との相違点、共通点を発掘することが必要であろう。

懐徳堂における経済思想の新しい展開が、江戸中後期における社会経済の変化にいかに対応したか、さらに明治維新後の状況の激変にどのようにかかわりあったかは、今後の研究にまたねばならない。

(15)論文：大月明「中井竹山について」（大阪市立大学文学部『人文研究』23・昭和四十七年）

本論文は、中井竹山および彼に影響を与えたと思われる三宅石庵、五井蘭洲の懐徳堂の歴史における位置づけをし、さらに竹山の思想と当時の社会状勢との関係を明らかにせんとするものである。全五節から成る。

㈠幕末から維新期における竹山の評価は、彼の著書『逸史』等に見られる江戸幕府礼讃の国家観の故に、尊王思想家の履軒に比して低いものだった。こうした評価の差は、その思想だけではなく、どちらかといえば消極的な履軒と、懐徳堂と自己の運命を積極的にぶつけていった竹山との、両者の態度の相違によるものと考えられる。

㈡山木積善はその著『中井竹山伝』において、竹山を日本無比の大儒と称している。伝記にありがちな修飾過多には注意をはらう必要があるが、彼は竹山を、徂徠学にもっとも痛烈な批判を加えた学者と捉え、また一風変わった行動を示した人物と

評価しているようである。

㈢竹山は、父の甃庵と親しかった五井蘭洲に師事した。蘭洲は父である持軒の学問を受け、併せて和学を研鑽した。彼の学問は、青年期の竹山にはもとより、懐徳堂の学風にも影響を与えたと考えられる。

西村時彦氏は、『懐徳堂考』において蘭洲を、石庵や甃庵以上に高く評価し、道義の書の外に、詩賦文章までも懐徳堂で教育するようになったのは蘭洲の功績であり、堂の学風を一変させたと述べている。武内義雄氏、神田喜一郎氏らも、竹山・履軒に多大な影響を及ぼしたとして、蘭洲を高く評価している。

こうした先学の、蘭洲に対する評価を否定はしないが、朱子学を基盤とし、そこに各学説を集中同化させようとした石庵、懐徳堂の創設期においてもっとも中心的存在であり、孝悌の徳目と人間の誠を強調した甃庵の果した功績は、多大なものがあったと思われる。

蘭洲が、竹山に最も大きな影響を与えた、徂徠学等他四派に対する批判の説も、右のような懐徳堂の学問の展開をふまえた、朱子学護持の立場からのものである。彼の文学研究の傾向も、石庵・甃庵のとっていた方針に基づき、受講者の要望に対応したことによるであろう。

こうした経過の中で、竹山は教育を受けたのである。竹山は、石庵・甃庵・蘭洲らによる教育と学問の伝統を、まとめあげた学者と言えるだろう。

㈣享保期前後を中心として、学問の世界ではいくつかの変化と新しい傾向があらわれてきた。まず、儒学諸派の理論討究が盛んになり、儒学の社会に与える影響も増大し、近世儒学は質量共に発展した。また、吉宗の文教政策とも相まって、儒学は庶民の教化にも積極的に利用されるようになった。官許学問所としての懐徳堂の出発も、その一環と言えよう。

竹山が活躍したのは、宝暦から寛政・享和に至る、幕藩体制の動揺が決定的になっていこうとする時期であった。竹山独自の経世的発言や、『逸史』にみられるような国家意識は、こうした時代背景によるものであろう。竹山の学問の性格は、単に懐徳堂の歴史の中だけでなく、政治・社会や学問の、全体的な動向の中でも考えてみる必要があるだろう。

㈤いろいろな意味で停滞期に入ろうとしていた大阪にあって、堂の学問・教育の伝統を発展させ、著作を重ねた竹山は、時代の展開を背景に、石庵・甃庵・蘭洲らとは、また異なった傾向をもっていた。それは政治・社会への、積極的な対応だったのである。

（寺門日出男）